令和８年度　橘小学校　学力向上プラン

長崎市立橘小学校
学力向上対策委員会

＜学校教育目標＞　誇りをもち、主体的で協働的な自律できる子どもの育成
～安全・安心を大切にするたちばなキッズ～

＜めざす児童像＞　知恵を出し合い創造する子ども（真剣）

＜目指す学校像・職員像＞
- ○　子どもに合った授業が展開される学校
- ○　プロとしての資質を磨き続け、協働する教職員

確　か　な　学　力（真剣）	
○　「主体的・対話的で深い学びの実現」 ①知識・技能の習得 ②思考力・判断力・表現力の育成 ③学びに向かう力・人間性の涵養 ○　「たちばなスタンダード学習編」の確立 ・学習の心構え　・「話す聞く」の習慣化	○　授業内容を焦点化した４０分授業 ○　単元を見通した授業づくり（全教科） ○　「対話」を取り入れた学びの工夫 ○　「学習の約束・心構え」「家庭学習の手引き」の確認と活用 ○　ICT 活用
教職員の指導力の向上・指導体制の充実	
○　授業改善による学力向上 ○　「あじさいスタンダード」の具現化と充実を推進 ○　キャリア教育推進による自己理解及び将来の目標と結びつけることによる学習意欲の向上 ○　GIGA スクール構想推進による情報活用能力の向上	○　「言語活動」の重視 ○　授業研究による指導力の向上 ○　基礎的・基本的な学習内容の定着 ○　図書館教育の充実 ○　外国語活動の充実のための連携 ○　校内研修・現職教育の活性化

具体的な目標

次年度、３～６年生に実施される長崎市、長崎県、全国学力・学習状況調査の平均正答率を前年度の結果よりも２ポイント向上させる。

具体的な取組

各学年で、学力調査の結果を受けた「学力向上プラン」を作成して、課題について重点的に取り組む。

	国語科	算数科
一年	・平仮名の定着に向け、毎時間の授業で、言葉や文章を「読む・書く」時間を確保する。 ・正確な音読ができるよう、普段の授業から緊張感をもって正しく文を読ませていく。 ・「たちばなタイム」において、平仮名・片仮名・漢字のテストを計画的に進める。また、テスト結果から自分の課題を見つけ、必要な練習方法を選択して取り組ませる。	・練習問題が終わった児童は、キュビナに取り組ませ、基礎的な力を高めさせていく。 ・文章問題を解くときは、問題文に線を引いたり、○で囲んだりして解く習慣をつけさせる。 ・問題を解いたり、説明したりするときには、図を活用させる。 ・「ねっこタイム」において、たし算・ひき算の 50 問テスト（５分間）を繰り返し行い、正確に速く処理できるよう習得を図る。

二年	・漢字の練習に自己調整学習を取り入れ、漢字の習得を図るとともに、主体的に学ぼうとする学習態度を養う。 ・平仮名・片仮名の学習を授業と宿題で繰り返し練習して完全に習得することを目指す。 ・毎日、教科書等の音読を課し、保護者の協力を得ながら、言葉に慣れ親しませる。	・練習問題が終わった児童は、キュビナに取り組ませ、基礎的な力を高めさせていく。 ・「ねっこタイム」において、基礎的な計算の力を高めるドリル的な学習を繰り返し行う。 ・かけ算九九の暗唱を全員ができるようにするために、宿題で保護者の協力を得ながら身に付けさせる。
三年	・書くときは、例文を提示し、文章構成に気を付けながら自分の文章を記述させる。 ・正確な音読ができるよう、普段の授業から緊張感をもって正しく文を読ませていく。 ・教室に話型を提示し、発表したり、反応したりできるようにしていく。	・キュビナを中心として１年生からの問題に取り組ませ、基礎的な力を高めさせていく。 ・文章問題を解くときは、問題文に線を引いたり、〇で囲んだりして解く習慣をつけさせる。 ・問題を解いたり、説明したりするときには、図や線分図なども活用させる。
四年	・クラスルームのコメント、単元末の振り返り、日々の授業で、「条件（理由・構成・文字数）を満たして書く」短文記述の機会を継続的に設定する。 ・国語辞典や図書資料を日常的に活用する。また、言葉の意味を調べる活動や、文章中の図表・見出しから必要な情報を探すミニワークを日常の授業に組み込む。 ・「知っている言葉を使って文章を書く」「意味を理解した上で表現する」という、知識をアウトプット（活用）する授業を仕組む。	・基礎的な計算練習を「ねっこタイム」で継続的に実施し、基本的な計算はスムーズに行えるようにする。 ・文章題などの立式を問う問題では、「テープ図」や「アレイ図」などの図を描く活動から立式につなげることを習慣化させる。 ・学習手順をスモールステップに細分化し、視覚によっても思考の定着を促す。 ・量感をとらえきれていない児童も多いことから、具体的思考と抽象的思考を往還しながら、量感の定着につなげる。
五年	・児童が考えたものは、全て受け入れることで、発言・発表をしやすい雰囲気をつくる。 ・児童同士の対話を多く仕組むことで、言葉の使い方や文章に着目した読み取りなどを経験して身に付けさせていく。 ・ICT 機器を活用して意見の整理やまとめを行い、対話が活発に行われるようにする。	・児童が解決したくなるような課題を精選・準備するよう教材研究を行う。 ・自力解決の場をしっかりと取り、対話で自分の考えを伝えられるようにする。 ・「わかったこと」「わからないこと」「友達と考えが違うこと」「もやもやしていること」などをすっきりさせられるように、対話の場を設定する。
六年	・「何のために話すのか」「何を質問したいのか」といった、「目的意識」や「話したいことの核」を意識する指導を行う。 ・学習を自己調整しながら、進んで取り組めるように、単元の導入で学習の進め方やルーブリックを児童と確認して授業を進めていく。 ・協働的な学習活動を意図的に仕組むことで、言葉で説明する場面を設定したり、ICT 機器を活用し、意見を整理したり、まとめたりする経験を増やす。	・ペアやグループでの活動など、対話が自然と生まれるような授業の展開を工夫する。 ・自分の考えや意見を、図を使ったり、理由や根拠を挙げて分かりやすく説明したりする場面を意図的に設定する。 ・それぞれの領域につながる系統性を、全職員で共通認識する必要がある。各学年、各単元での指導事項とそれがどう次の学習に生かされていくかを理解したうえで、全職員で授業改善を行っていく。